

#03_私が気持ちよくしてもらう必要なんて…ないのに

「ん～…」

「は～…」

「ん～…」

「…ん。コホン…」

「ねえ、あのさ…あんた、本当に私を部屋に置いて、そのままにしておくつもり？」

「いや、あんた言ったじゃん。私に愛を教えてくれるってさ」

「言ったし。覚えてるし」

「はあ～…あんだけ言ったくせに…いや、別にいいんだけどさ」

「別に住まわせてもらってるからって、愛とか感じないからね」

「そういう狙いがあったんだったら、残念でした」

「…意気地がないっていうか…臆病だよね。あんた」

「何したって良いって言ってんだから…ちょっとくらい手、出せばいいじゃん」

「別に、変な事されたいってわけじゃないけどさ」

「数日住まわせてもらってるし、何されたって文句は言わないよ」

「ん…私に言われて、やっとやる気になったの？」

「はあ…ま、いいよ。好きに使いな」

「ほら…んっ…？」

「あっ…んっ！ ちゅっ！ ちゅううう…！」

「んっ…ちょ、待って…ちゅっ！ ちゅう…ちゅっ…！」

「はあ、はあ…はあ…はあ…何するかと思えば…キス？」

「別に何したって良いって言ったのに…」

「ん、いいよ。別にあんたがしたい事すれば…そういう約束だし」

「ちょっと、びっくりしただけだし」

「ほら、すればいいじゃん」

「んっ…！ ちゅつ、ちゅう！ んちゅつ！ ふつ…ちゅう…んふつ、んつ！ ちゅつ！ ちゅう！」

「はあ、はあ…んんつ！ ちゅつ！ ちゅつ！ ちゅう！ んちゅう…んつ…ふう…ちゅつ！」

「んつ！ 待ってっ！ チュッ！ ちょっと…んちゅう、苦しい…っ！ ちゅううう…」

「ぷはあつ！ はあ、はあ…はあ、ふう…」

「んつ…ごめ、ちょっと…息、できなくなつて…」

「んつ…別に、あんたが気にする事じゃないし…それよりも…」

「はあ、はあ…ふう…続き、しないの？」

「あんたの愛ってのは、これでおしまい？」

「んつ！ ほら、来なよ」

「んつ…はあ、んつ！ ちゅつ！ ちゅう！ んちゅつ、ちゅう…ちゅぷ、んちゅう…」

「ちゅう、ちゅう、ちゅつ…んちゅう、はあ、ふう♡ んちゅ、ちゅつ…んちゅう、ちゅう…」

「はあ、はあ♡ んつ、ちゅう、ちゅうう…はあ、ふう…ちゅつ、ちゅぷ…んちゅう…」

「んうちゅつ♡ ちゅぷつ♡ はあ、はあ、んつ！ んちゅう、んつ！ れろ、れるつ」

「れろちゅう、んんつ！ んちゅ、れる…はあ、んつ！ ちゅうつ、ちゅう…ちゅうううつ…」

「はあ、はあ、ふう、ふう…ごめん…息継ぎしようしたら、舌…当たつちやつて…」

「なんか、その…エッチだし…思わず、口…離しちゃつた…はあ、ふう…」

「は、私からしたくてしたわけじゃないっていうか、そういう事だから」

「べ、別に…あんたがやりたいっていうのなら、やっても良いけど…」

「ほら、何したって良いって言ってるんだからさ…」

「んつ！ してみなよ」

「んつ…んちゅつ！ ちゅう！ んちゅつ、ちゅう…はあ、はあ…♡」

「んつ…！ んちゅう、れる…れろつ…んふう♡ れろ、ぷちゅう…！」

「んんつ、れる、れる、れるれるれろむちゅ…んちゅう、んつ、はあ♡」

「れるれる、れろ、れる…むちゅつ、れる、れろ…れるううう…んつ…ぷはあ♡」

「はあ、はあ、はあ…んつ♡ 何…これ…」

「ん、別になんでもない…」

「こんな風に、キスされるの…初めてだったから、驚いてるだけ」

「は…っ、感じてるわけないし」

「愛とかどうとか、そういうのも全然伝わってない！」

「そんな事よりも、もっと私の身体を使ってやりたい事とかあるんじゃないの？ 焦れったいっ！」

「キスだけじゃなくてさ、もっとこう…あるでしょ？」

「何考てるかわかんないけど、んっ…」

「こうやって胸揉んだりとか、セックスしたりとか、そういうの…するもんでしょ！」

「んっ、あっ！ ふう、ふう、そうそう…やればできるじyan」

「男なんて、皆自分の事しか考えてないんだから…」

「そうやって、欲望のままにさ、好きなようにすれば…」

「んっ…！ んっ！ んちゅつ、ちゅう、ちゅぷ、んんっ…」

「んっ、まだ、話してる途中なの…んちゅう、れるれる…にい♡」

「はあ、ふう♡ んちゅう、れるれる、れろむちゅつ、んふつ♡ んんつ♡」

「んちゅう…♡ れるれる、れろちゅう♡ んっ♡ れるれる、れろむちゅう♡」

「んふう♡ はあ、ふう♡ んるれるう、れるれう…れろれろれろ…」

「れるう♡ れろお、れろう…はあ、ふう♡ れるれる、れろむちゅう♡」

「はあ、はあ…はあ、はあ♡ んっ…人が喋ってる時にい…はあ、はあ…」

「別に、何しようが勝手だけど…きあ…」

「あんたの狙いが、本当…わかんないんだけど…」

「胸揉みながらさ、キスしかしない気？」

「…ムカつく」

「んちゅう、れるれる、れろぶちゅつ…んちゅう、れるれう…」
「れるう♡ んふ、れるれる、れろれろれるつ…♡ んふう、ふう♡」
「んつ♡ れる、れるれる、れろちゅう♡ はふう♡ れるれるれるれるつ…」
「んう、んつ♡ れるれろ、れるつ…んつ♡ んんつ♡ れろむちゅつ♡」

「んんつ♡ んつ！ あふあ、ま、待って…んちゅつ、ちゅう…」
「なんか、変な感じになつたっていうか…んちゅう、れるれる、れろちゅう♡」
「なんか…来そう…♡ んちゅう、だから♡ 一回、んちゅう、止めて…♡」

「んんつ！ んちゅつ♡ はあ、んんつ！ んちゅ、れるれる、れろちゅう♡」
「らめつ…らってえ、んんつ、れるれる、れるれろ、れるむちゅう♡」
「んう！ らめつ…んちゅ、ちゅぶつ、らめ…らめつ…ちゅぶつ、んちゅううう♡」
「んつ、んちゅう、んつ！ んんんんん～っ！」

「んん♡ んんうむ…♡ んちゅ、れるれる、れる、れろ、んふう♡ れるれるれる…」
「んつ…ぶふう…はあ♡ はあ♡ はあ♡ はあ♡」

「はあ、はあ…あんた、何したの…？」
「こんな…キスで、身体…嘘…はあ、ふう…」

「ん…それで、次は何をするつもり…？」
「するんでしょ…そろそろ…その…」

「…へ？」

「終わり…？ これで…？」
「…まあ、あんたが良いくて言うんならいいけどさ…」
「でも、これじゃあ…私が一方的に、その…気持ち良くしてもらつただけだし…」
「だから…少しだけサービスしてあげる」

「その、ベッドで一緒に寝てあげるから…」
「別に…寝るだけだし。手出したりしたら、許さないから」
「ん、それじゃあ…さっさと寝る準備、しよ」